

## 小田原城の地震の記念碑

神奈川県温泉地学研究所 平野富雄

小田原城は小田原のシンボルである。JR や小田急線で小田原駅に降りると、真っ先に目に入るのが小田原城天守閣である（写真 1）。昭和 28 年に私が入学した高等学校は、このお城の北西側の通称八幡山にあったので、この界わいは今でも大変懐かしい場所の一つである。

学校の授業の後、小田原駅で汽車に乗るまでの下校コースは三つあった。最短が百段坂を下りるコースであり、最も遠回りが「0J まわり」と友達と称したコースである。学校の正門から競輪場の横を通り、二宮神社前を経て「御感の藤」から馬屋曲輪へと抜けるのが「0J まわり」であった。お掘りのきわから城址への抜け道へ入ると、馬屋曲輪跡と書いた白い標柱が立っていて、生け垣を隔てたその内側に「0J」すなわち県立小田原城内高校があった。今ではこの女子校も移転してしまったが、当時は、お掘りの内側に建っていたのである。土曜日などは、何人かの友達と国府津での乗り換え列車の時間に合わせて「0J まわり」でよく帰ったものである（図 1）

写真 1 小田原城天守閣、天守閣の左下に見えるのが観覧車





図1 小田原城址周辺（昭和32年発行国土地理院2万5千分の1地形図、小田原北部、小田原南部による）

当時、天守閣はまだ無く、遠くからは城址の遊園地に立っている飛行塔と観覧車がよく見えた。これらは昭和25(1950)年に小田原市制10周年記念事業として開かれた「小田原子ども文化博覧会」のさいにできたもので、今でも近郷の子ども達には結構親しまれているようである。

現在、城址にそびえている白亜の天守閣は小田原市制20周年記念事業として、昭和35(1960)年に竣工した(写真2)。中野敬次郎著の「近世小田原ものがたり」によると、現在の再建された天守閣は、天正8年(1580)に北条氏直が建立した最初の天守閣から数えて4度目のものであるという。最初の天守閣は小型の二重式で、江戸時代の寛永10年(1633)の地震で完全に崩壊してしまった。時あたかも、春日局の子息の稲葉正勝が城主となって50日後のことだという(中野、1978)

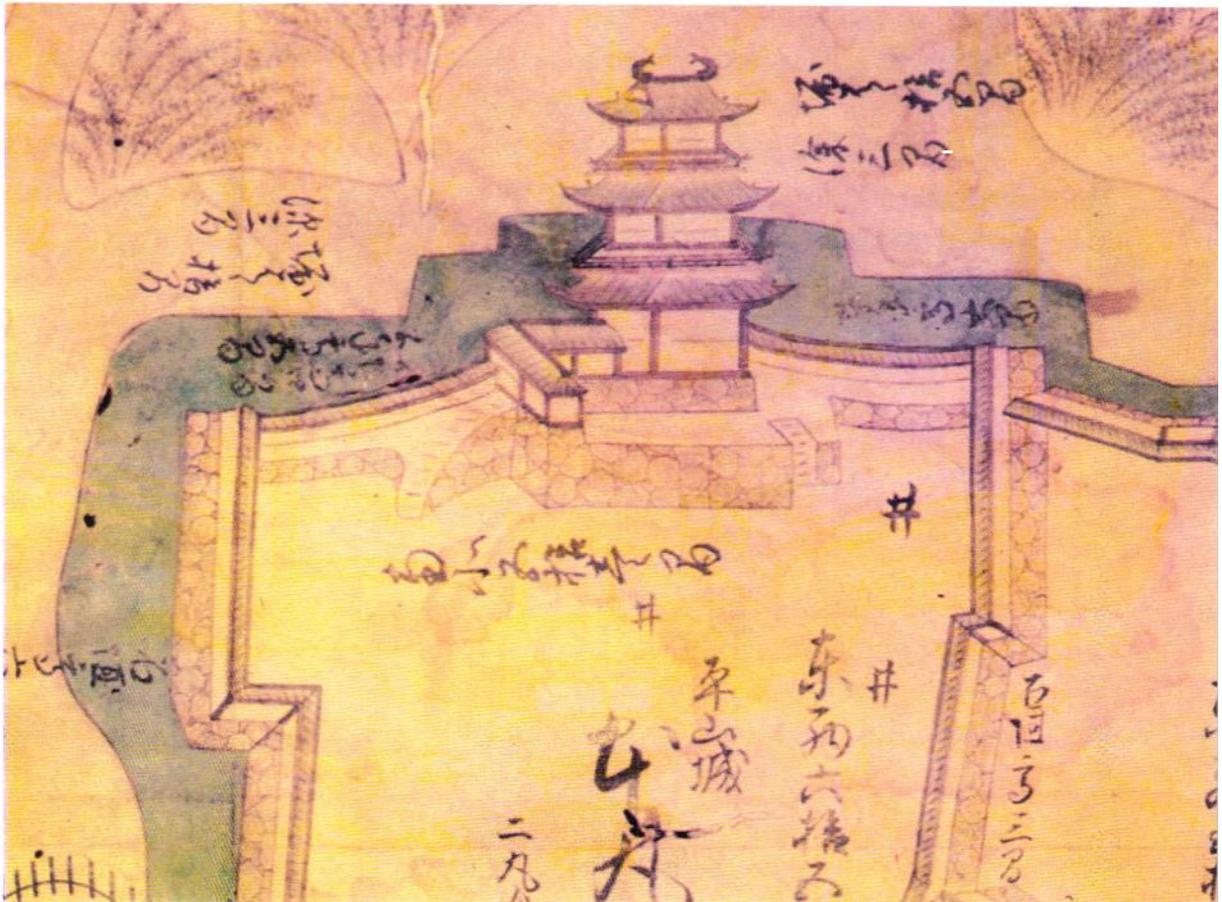
直ちに三重の複合式天守閣が新築されたが、元禄16年(1703)の地震で焼失してしまった。これが2度目のもので、存続期間は70年間である。

小田原市立図書館の館報(164~167号)の表紙に小田原城天守閣の絵図が取り上げられたので、その解説によって天守閣の変遷を知ることができる。写真3は「正保図天守」と呼ばれるもので、寛永以後、元禄の地震で炎上するまで70年間そびえていたものであるという。屋根はどの層にも破風を飾らず、第一層と第二層がともに寄棟で、最上層は入母屋である。第二層と最上層に勾欄(うらん)を持つことや、四隅の柱が露出する天守閣は桃山時代の様式の名残りであるという(田代、1992b)。



写真2 昭和35年に再建された小田原城天守閣

写真3 正保図天守閣（小田原市立図書館報、79号）



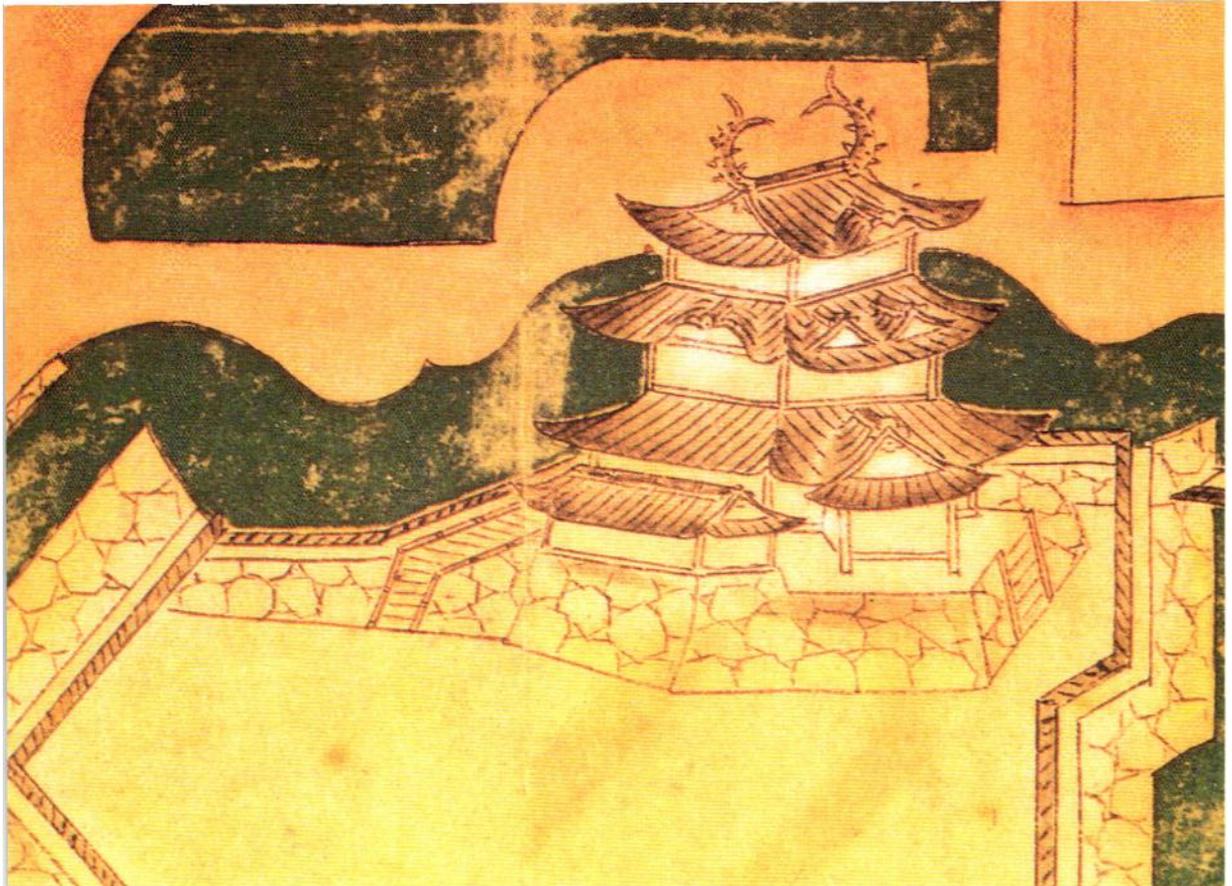


写真4 享保図天守閣（小田原市立図書館報、80号）

3度目は元禄地震の3年後の宝永3（1706）年に新築落成した三重複合式天守閣で、明治3（1870）年に廃城となって売り払われるまでの165年間そびえ立っていた。その天守閣の外観は写真4の「享保図天守」の絵図で知ることができる「正保図天守」と同様に屋根は第一層と第二層がともに寄棟で、最上層は入母屋であるが、破風で屋根が飾られている（田代、1992a, c）。

宝永の天守閣再建以後、小田原城下は天明の地震、嘉永の地震と2度の直下型地震にみまわれたが、天守閣は倒壊を免れた。天明の地震では天守閣が北東に30度傾いたが、綱で引き起こして修復された。嘉永の地震では、天守閣の被害は大破程度ですんだ。

#### 小田原城天守閣内に展示されている宝永2年小田原城復興碑（元禄大地震の記念碑）

元禄地震後の再建のさいに藩主の大久保忠増は復興記念の銘文を石に刻み、天守閣の石垣に文面を裏にして埋め込ませた。大正12（1923）年の関東大地震のさいに、天守閣跡の石垣が崩れて、銘文を刻んだ石の面が現れて発見されたのである。現在、その石垣の石が宝永2（1705）年小田原城復興碑として、小田原城天守閣内に展示してあるが、これは元禄大地震の記念碑といえる（写真5）。

江戸時代以降のほぼ400年間に、平均73年おきに小田原付近を震源とする地震が5回起き、その都度小田原城下が大きな被害にみまわれたのである。とりわけ小田原城が大きな被害を受けたので、地震のたびに再建や修理、修復が繰り返された。時計ではなかったように一定の間隔で起きた5回の地震は、小田原城修復の歴史でもあった（表1）。

表 1 小田原地震年代表

日本 歴	西 暦	地震の規模 (M: マグニチュード) および被害等の概要		政治・社会・文化に関する事項
		M	小田原直下の地震 / 東海地震・火山噴火など	
寛永 09 年 11 月 27 日	1632			稲葉丹後守正勝、小田原城主に封ぜられ入城 (八万五千石)。
<b>寛永 10 年 01 月 21 日</b>	<b>1633. 03. 01</b>	<b>7. 0</b>	<b>小田原城倒壊。</b> 城の矢倉・門塀・石垣ことごとく破壊。小田原で民家の倒潰多く、死者 150 人。箱根で山崩れ。熱海に津波が襲来した。 城主稲葉正勝負傷。	城主 稲葉正勝他界 (38 才)。 稲葉正則家督をつぐ (12 才)。
寛永 11 年 01 月 25 日	1634			
寛永 17 年～ 万治 03 年	1640～ 1660		↑ <b>70 年</b> ↓	相模国：寛永検地。 足柄上下郡 (小田原領)：万治検地。
万治 03 年	1660			下田隼人、麦租減免の越訴。 隼人処刑 (万治 03 年 12 月 23 日)
<b>元禄 16 年 11 月 23 日</b> (元禄地震)	<b>1703. 12. 31</b>	<b>7. 9～ 8. 2</b>	<b>相模、武蔵、上総、安房で震度大。特に小田原で被害大きく、城下は全滅。</b> 12 箇所から出火。倒壊家屋 8000 以上、死者 2300 人以上。東海道は川崎から小田原までほとんど全滅。 大久保忠増、城の復旧を記念した石碑を石垣に組み込む (関東大地震で崩れた石垣の中から発見された)。	
宝永 04 年 10 月 04 日 (宝永地震)	1707. 10. 28	8. 4	↑ <b>79 年</b> ↓	宝永の東海大地震 東海道、伊勢湾、紀伊半島で被害大。 富士山 (宝永山) 噴火。 伊豆大島大噴火。
宝永 04 年 11 月 23 日	1707			
安永 06 年	1777			
<b>天明 02 年 07 月 15 日</b>	<b>1782. 08. 23</b>	<b>7. 0</b>	<b>小田原城破損。</b> 天守閣北東に 30 度傾く。宮匠川辺匠太夫は傾いた天主閣に綱をかけしゃち巻で引き起こした。人家約 800 破損。箱根、大山等で山崩れ。 この地震には前震があった。月はじめから地震があり、13 日にかなり大きな地震があり、15 日に二度大震があった。	天明の大飢饉
天明 02～07 年	1782～1787		↑ <b>71 年</b> ↓	浅間山大噴火
天明 03 年	1783			
天明 07 年 07 月 23 日	1787			二宮金次郎誕生 (小田原栢山)
<b>嘉永 06 年 02 月 02 日</b>	<b>1853. 03. 11</b>	<b>6. 7</b>	<b>小田原城破損。</b> 小田原の被害が大きく、領内の潰家 1000 余、死者 23、山崩れ箇所多数。津波無し。	
安政 01 年 11 月 04 日	1854. 12. 23	8. 4	↑ <b>70 年</b> ↓	安政東海地震。被害は関東から近畿に及ぶ。
安政 01 年 11 月 05 日	1854. 12. 24	8. 4		安政南海地震。
<b>大正 12 年 09 月 01 日</b> (関東大地震)	<b>1923. 09. 01</b>	<b>7. 9</b>	<b>小田原城石垣大破。</b> 小田原市の被害甚大。国府津一松田断層に沿う地域では 80% 以上の倒壊率となった。津波あり。地盤の液状化各地に発生。	

地震のマグニチュード (M) は理科年表 (平成 5 年版、丸善) による。

前ページと同じもの。  
(こちらは画像)

表1 小田原地震年代表

日本歴	西暦	地震の規模 (M:マグニチュード) および被害等の概要		政治・社会・文化に関する事項
		M	小田原直下の地震 / 東海地震・火山噴火など	
寛永09年11月27日	1632			稲葉丹後守正勝、小田原城主に封ぜられ入城 (八万五千石)。  城主 稲葉正勝他界 (38才)。 稲葉正則家督をつぐ (12才)。  相模国：寛永検地。 足柄上下郡 (小田原領)：万治検地。  下田隼人、妻租減免の越訴。 隼人処刑 (万治03年12月23日)
寛永10年01月21日	1633.03.01	7.0	小田原城倒壊。城の矢倉・門堀・石垣ことごとく破壊。小田原で民家の倒潰多く、死者150人。箱根で山崩れ。熱海に津波が襲来した。 城主 稲葉正勝負傷。	
寛永11年01月25日	1634			
寛永17年 ~ 万治03年	1640 ~ 1660		↑ 70年 ↓	
元禄16年11月23日 (元禄地震)	1703.12.31	7.9~ 8.2	相模、武蔵、上総、安房で震度大。特に小田原で被害大きく、城下は全滅。12箇所から出火。倒壊家屋8000以上、死者2300人以上。東海道は川崎から小田原までほとんど全滅。 大久保忠増、城の復旧を記念した石碑を石垣に組み込む (関東大地震で崩れた石垣の中から発見された)。	
宝永04年10月04日 (宝永地震)	1707.10.28	8.4	宝永の東海大地震 東海道、伊勢湾、紀伊半島で被害大。	
宝永04年11月23日	1707		富士山 (宝永山) 噴火。	
安永06年	1777		伊豆大島大噴火。	
天明02年07月15日	1782.08.23	7.0	小田原城破損。天守閣北東に30度傾く。宮匠川辺匠太夫は傾いた天主間に綱をかけしゃち巻で引き起こした。人家約800破損。箱根、大山等で山崩れ。 この地震には前震があった。月はじめから地震があり、13日にかなり大きな地震があり、15日に二度大震があった。	
天明02~07年	1782~1787		↑	天明の大飢饉。
天明03年	1783		71年	浅間山大噴火。
天明07年07月23日	1787		↓	二宮金次郎誕生 (小田原栢山)
嘉永06年02月02日	1853.03.11	6.7	小田原城破損。小田原の被害が大きく、領内の潰家1000余、死者23、山崩れ箇所多数。津波無し。	
安政01年11月04日	1854.12.23	8.4	安政東海地震。被害は関東から近畿に及ぶ。	
安政01年11月05日	1854.12.24	8.4	安政南海地震。	
大正12年09月01日 (関東大地震)	1923.09.01	7.9	小田原城石垣大破。小田原市の被害甚大。国府津一松田断層に沿う地域では80%以上の倒壊率となった。津波あり。地盤の液化化各地に発生。	

地震のマグニチュード (M) は理科年表 (平成5年版、丸善) による。

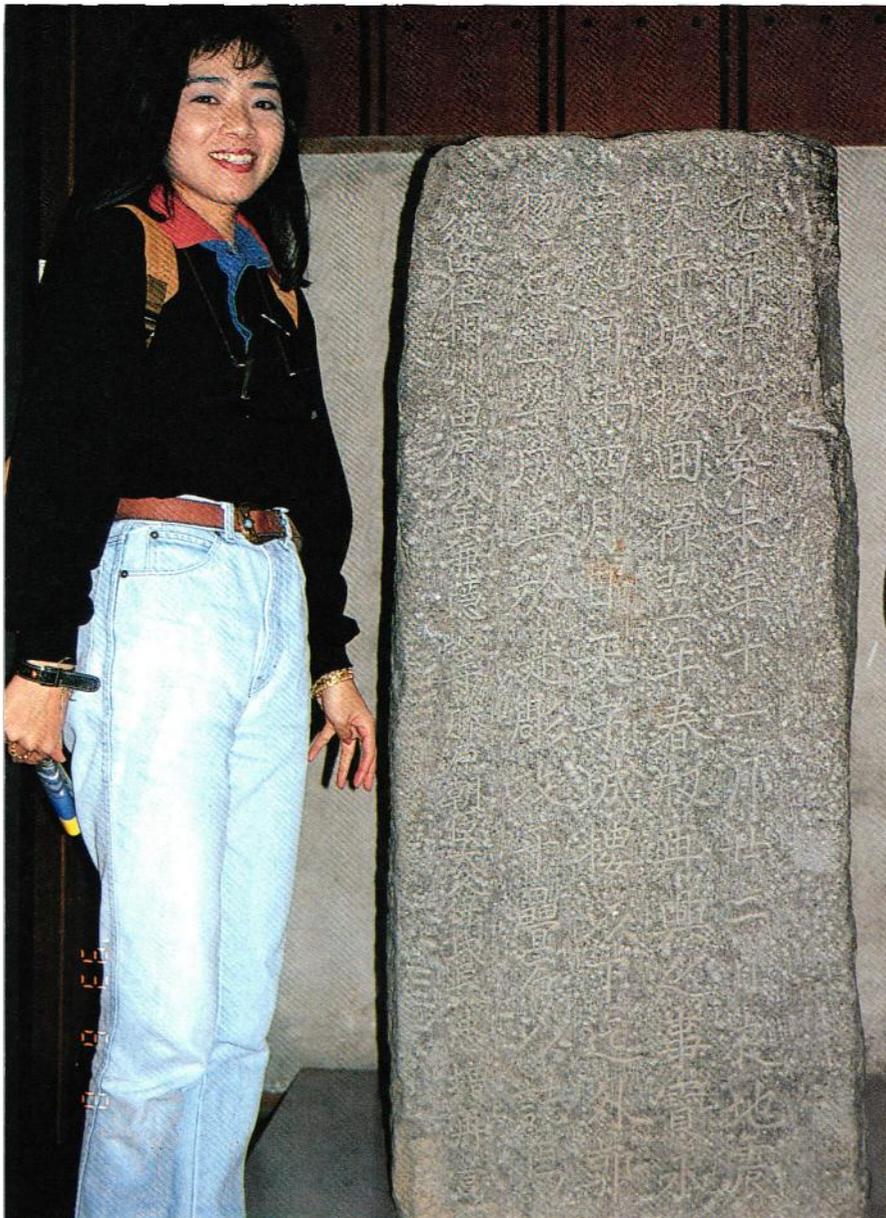


写真5 宝永2年小田原城復興碑（元禄大地震の記念碑）

寶永二年小田原城復興碑

元禄十六癸未年十一月二日夜地震  
天守城樓回禄翌年春朔再興之事寶永  
二己酉年四月日天守城樓以下迄外郭  
惣石壁築成矣於是彫攻于墨石以誌焉  
從四位相州小田原城主兼隱岐守  
藤原朝臣大久保氏長忠増再當

関東大地震で崩れた本丸の石垣と常盤木門石壘復旧碑

天守閣の建つ本丸の周りには、今でも大正の関東大地震の際に崩壊した石垣が当時のままで横たわっている（写真6、7）。正保図も、享保図でも本丸の石垣は、天守閣の石垣と同じ面に積まれている。このことから考えると、現在、本丸の周りに崩れて横たわっている石垣は、地震の際に上の地面から下までずれ落ちてきたことになるのだろうか。

小田原城本丸の正門を「常盤木門」というが、この門の壘郭も関東大地震で崩れてしまった。この石壘の復旧と、常盤木門の復元作業が始まったのは天守閣の再建と同じ昭和35（1960）年のことである。この常盤木門等の復旧を刻んだ記念碑が、門の対面の植え込みの中に据えられている（写真8、9）



写真6 大正12年の関東大地震で崩れた本丸の石垣

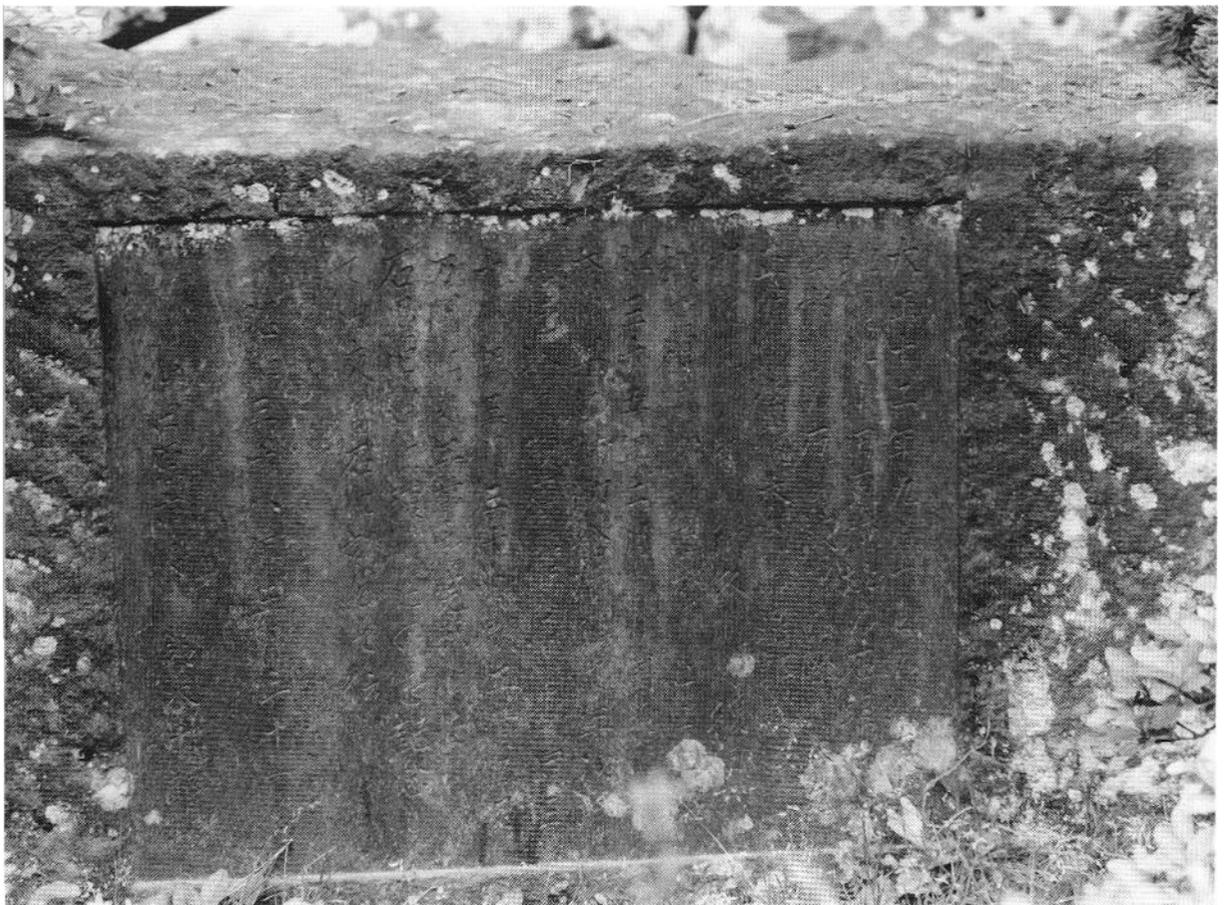
写真7 大正12年の関東大地震で崩れた本丸の石垣





写真8 復元された常盤木門

写真9 常盤木門石塁復旧碑



常盤木門石塁復旧碑

大正十二年九月一日の関東大地震に小田原城址の石垣殆んど崩潰の厄を被った際本丸正門の常盤木門の塁郭もまた崩れたその後久しく復旧の機を得なかつたが、ここに昭和三十五年二月より国並に神奈川県補助を得て年次計画を以て復原に着手し、同三十八年三月三十日総工費五百万円にて工事を完成した。石塁旧観に復したのを記念して由来を石に刻して伝う

昭和三十八年三月三十一日  
小田原市長 鈴木十郎

### 二の丸の発掘調査と「中堀」の復元工事

小田原城址では発掘調査と復元工事が活発に行われている。昭和 58（1983）年からは二の丸の「中堀」の発掘調査が始まった。「中堀」は関東大地震の時に崩れてしまったので、昭和 3（1928）年に埋め立てられた。この埋め立てられた「中堀」の位置に、かつて「0J」すなわち小田原城内高校があったのである（写真 10、11、12）。二の丸の「中堀」の発掘では、戦国時代の防御用構造物の「障子堀」などが見いだされた。中堀の石垣は往事の積み方で復元され（写真 13）、平成 5（1993）年 4 月には堀に水が満たされた（写真 14）。平成 5 年度からは新たに銅門（あかがねもん）の復元工事が始まり、平成 9（1997）年に完成する運びになっているという（写真 15）。

### 参考文献

国立天文台編（1992）理科年表（平成 5 年）、丸善、828-845.

中野敬次郎（1978）近世小田原ものがたり、名著出版、1-283.

田代道弥（1992a）小田原の城絵図を歩く（1）天守閣の見かた、小田原市立図書館報、77号、8.

田代道弥（1992b）小田原の城絵図を歩く（3）稲葉氏時代の天守—正保図天守閣、小田原市立図書館報、79号、8.

田代道弥（1992c）小田原の城絵図を歩く（4）徳川家天守の様式—現在の天守閣、小田原市立図書館報、80号、8.

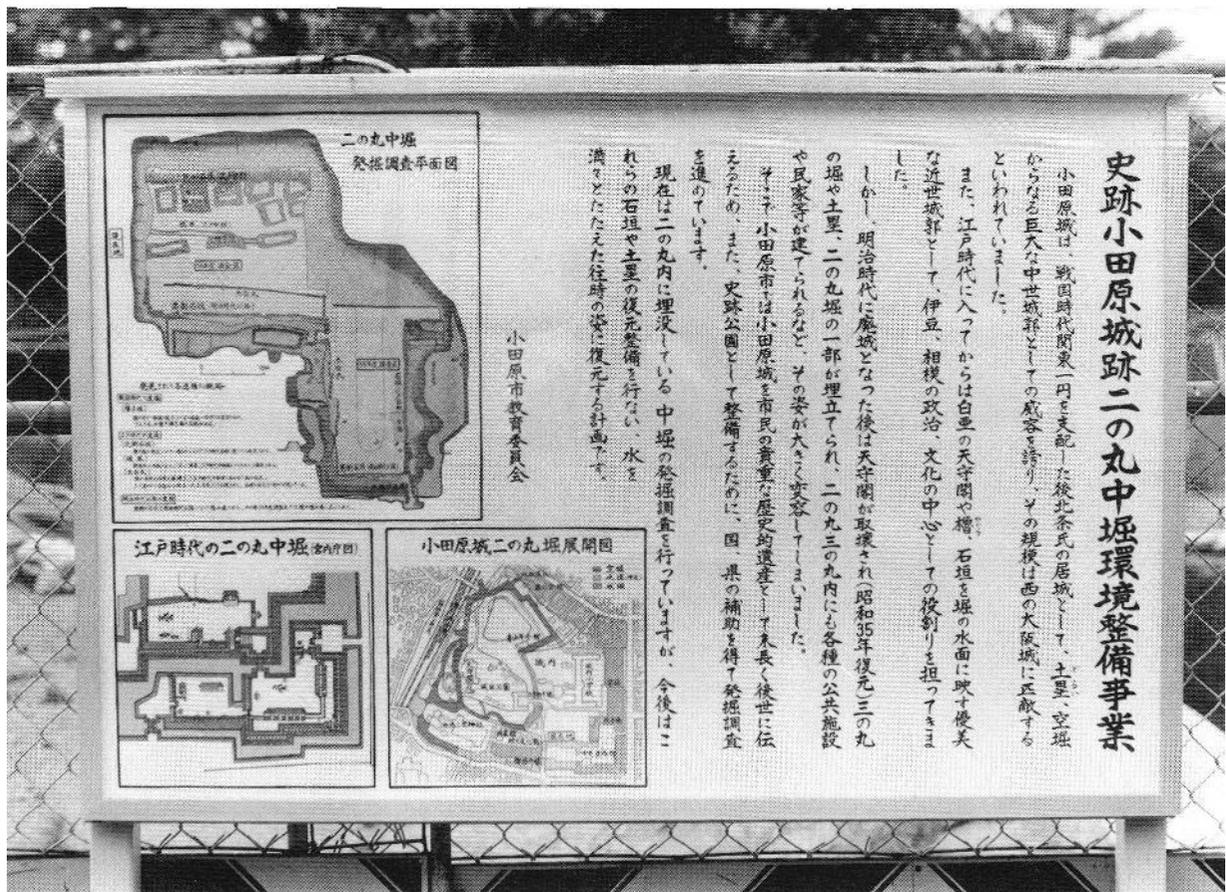
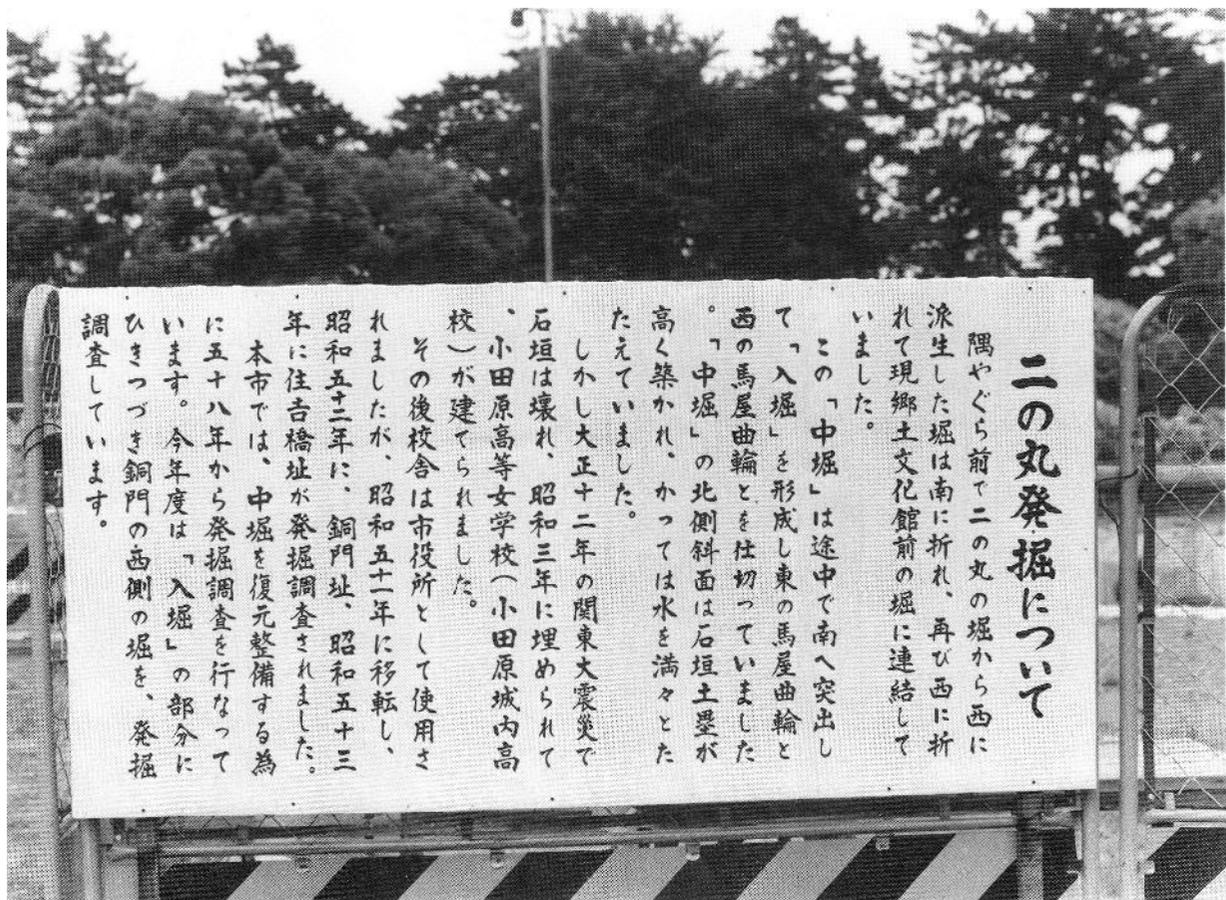


写真10 二の丸中堀の環境整備事業の看板（昭和60年6月撮影）

写真11 二の丸の発掘について（昭和60年6月撮影）



## 二の丸発掘について

隅やぐら前で二の丸の堀から西に派生した堀は南に折れ、再び西に折れて現郷土文化館前の堀に連結していました。

この「中堀」は途中で南へ突出して「入堀」を形成し東の馬屋曲輪と西の馬屋曲輪とを仕切っていました。「中堀」の北側斜面は石垣土塁が高く築かれ、かつては水を満々とたたえていました。

しかし大正十二年の関東大震災で石垣は壊れ、昭和三年に埋められて、小田原高等女学校（小田原城内高校）が建てられました。

その後校舎は市役所として使用されましたが、昭和五十二年に移転し、昭和五十三年に、銅門址、昭和五十三年に往吉橋址が発掘調査されました。

本市では、中堀を復元整備する為に五十八年から発掘調査を行なっています。今年度は「入堀」の部分にひきつづき銅門の西側の堀を、発掘調査しています。

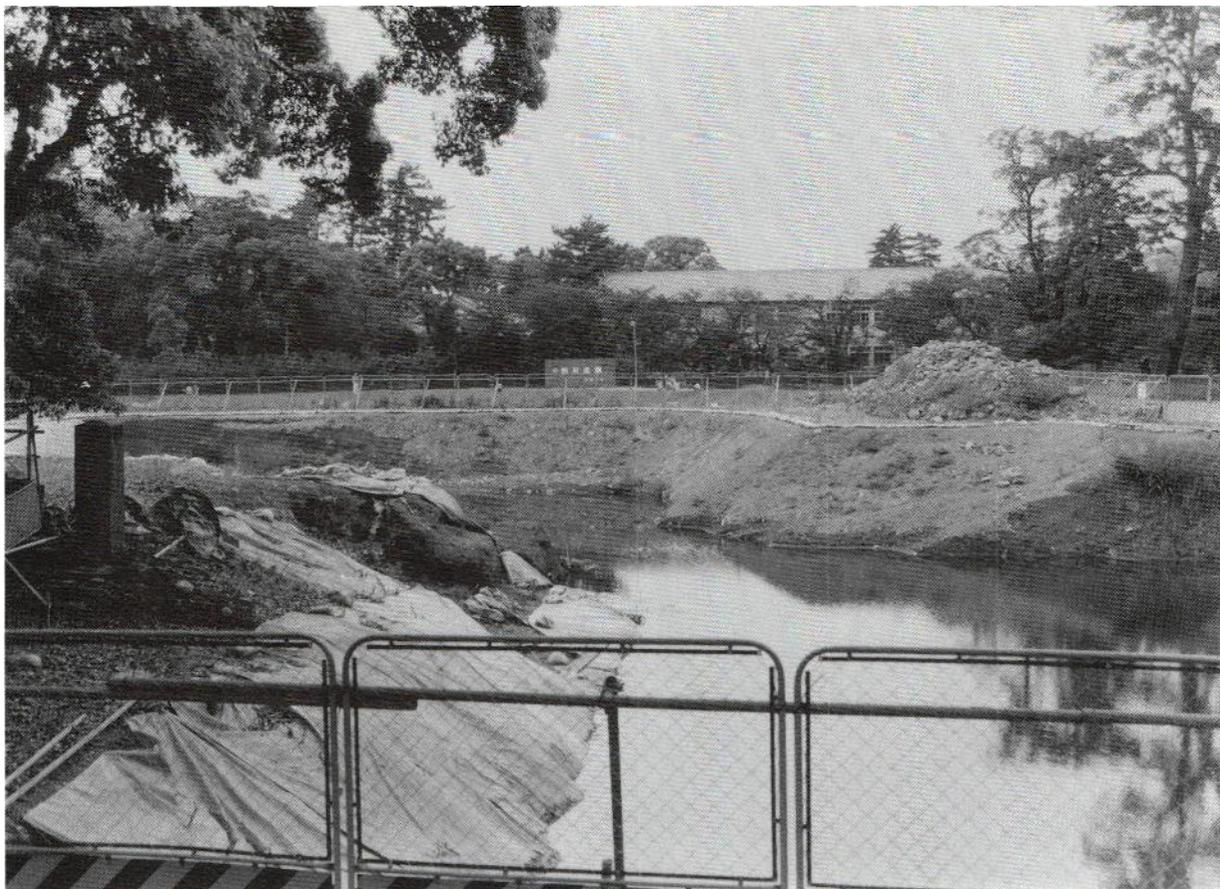


写真12 二の丸中掘の発掘調査現場（昭和60年6月撮影）

写真13 石積みをほぼ終えた中掘（平成5年2月撮影）



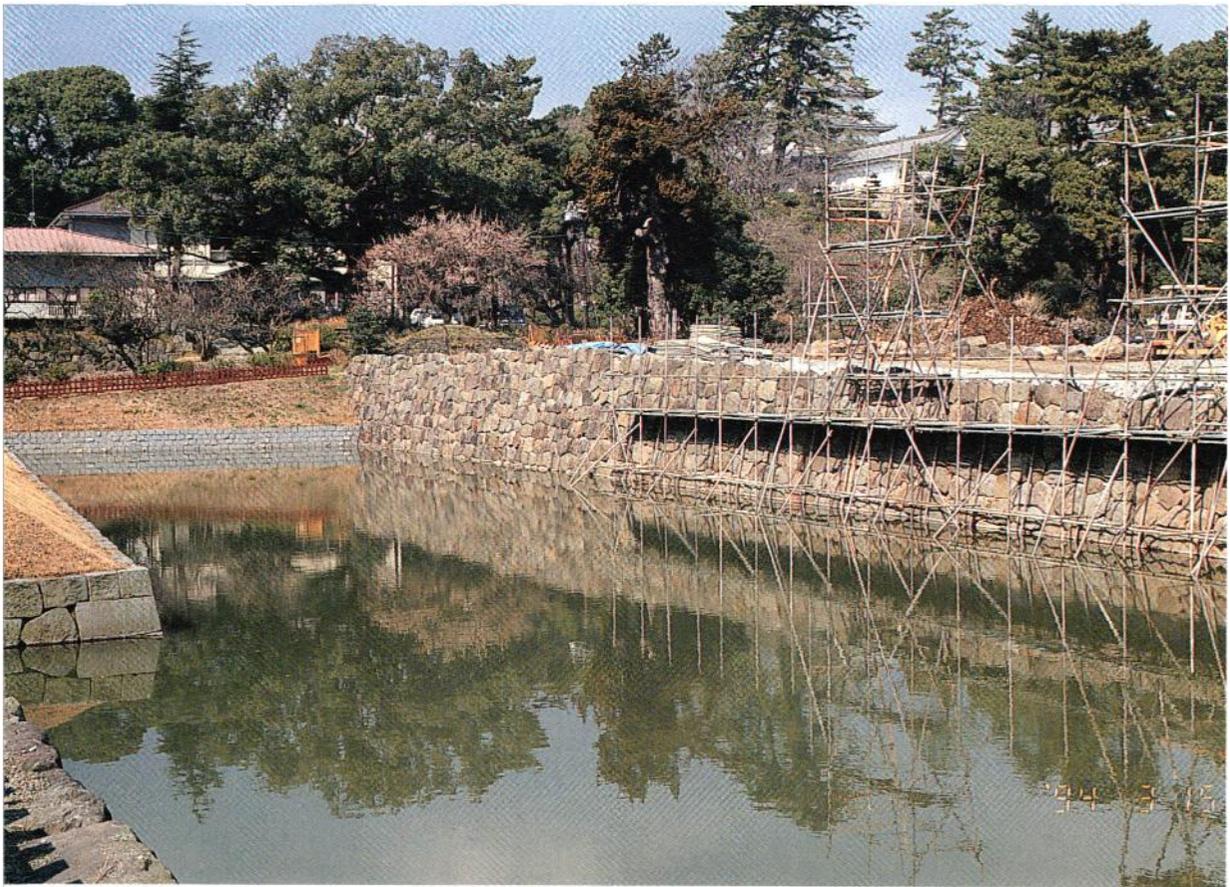


写真 14 水が満たされた中掘（平成 6 年 3 月撮影）

写真 15 復元工事が始まった銅門（あかがねもん）（平成 6 年 3 月撮影）

